

平成16(2004)年度

# 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

服部古墳群  
天神山遺跡

2005

鳥取市教育委員会

## 序 文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりましたが、平成16年11月の周辺町村との合併で人口20万人余りを有する山陰有数の都市としてさらに羽ばたこうとしております。

現在市内には数多くの遺跡が知られておりますが、各種開発事業に伴うその取り扱いはますます重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言われてまいりましたが、地方重視、地方発信が叫ばれる今日、地域の先人たちの知恵・交流を窺い知ることは、これからの生活・交流等にならずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく関係各機関との協議を重ね、また市民の皆様のご理解をいただきながら文化財保護行政を進めております。

さてここに報告いたします服部古墳群、天神山遺跡の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって無事初期の目的を果たし、ここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係の皆様のご利用に供していただければ幸いです。

平成17年3月

鳥取市教育委員会  
教育長 中川 俊 隆

## 本文目次

I はじめに	1
1. 発掘調査の契機と調査の目的	1
2. 発掘調査の経過	1
II 服部古墳群	3
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 発掘調査の概要	4
小結	4
III 天神山遺跡	6
1. 遺跡の位置と環境	6
2. 発掘調査の概要	9
小結	11

写真図版・報告書抄録

## 挿図目次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	2
第2図 服部古墳群 調査トレンチ配置図	3
第3図 服部古墳群 調査トレンチ実測図	5
第4図 服部古墳群 第1トレンチ出土遺物実測図	5
第5図 天神山遺跡 調査トレンチ配置図	6
第6図 天神山遺跡 調査トレンチおよび検出ピット状遺構実測図	7, 8
第7図 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	10
第8図 天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図	12

## 図版目次

PL. 1 1. 服部古墳群 航空写真	2. 天神山遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北北東から)
2. 服部古墳群 第1トレンチ掘り下げ状況(北東から)	3. 天神山遺跡 第1トレンチ東壁断面(北から)
3. 服部古墳群 第1トレンチ南壁断面(北から)	PL. 4 1. 天神山遺跡 第1トレンチ遺構内遺物出土状況(北北東から)
4. 服部古墳群 第2トレンチ掘り下げ状況(北西から)	2. 天神山遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北から)
5. 服部古墳群 第2トレンチ西壁断面(北から)	3. 天神山遺跡 第2トレンチ東壁断面(北西から)
PL. 2 1. 服部古墳群 第3トレンチ掘り下げ状況(南東から)	PL. 5 1. 天神山遺跡 第2トレンチ P-01断面(西北西から)
2. 服部古墳群 第3トレンチ東壁断面(西から)	2. 天神山遺跡 第2トレンチ P-04断面(西北西から)
3. 服部古墳群 第4トレンチ掘り下げ状況(北東から)	3. 天神山遺跡 第2トレンチ 礎石状平台検出状況(西北西から)
4. 服部古墳群 第4トレンチ 周溝部分断面(南から)	4. 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物(1)
5. 服部古墳群 第1トレンチ出土遺物	PL. 6 1. 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物(2)
PL. 3 1. 天神山遺跡 調査地遠景(南西から)	PL. 7 1. 天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物

## 例言

1. 本書は、平成16年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は服部古墳群、天神山遺跡である。
3. 本書に用いた方位は磁北を示す。また、レベル(H)は、服部古墳群は任意のレベル、天神山遺跡は海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体 鳥取市教育委員会

事務局 鳥取市教育委員会 庶務課文化財室(～平成16年10月)、文化財課(同年11月～)

調査担当者 前田 均・谷口恭子・平川 誠

## I はじめに

鳥取平野を中心に拓けた鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、これまで県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきたが、このたび平成16(2004)年11月1日をもって周辺8町村との合併がなされ、人口は20万2千人余りと念願の20万都市が実現し、面積も中国地方有数の765.66km<sup>2</sup>へと広がることとなった。このため市域もそれまでの主として千代田川流域に発展した地域から、北は日本海に面し、北東は駒馳山山頂から南に延びる立岩山系の分水界で岩美町に接し(旧福部村)、東は氷ノ山・後山郡岐山園定公園の扇の山を境に兵庫県温泉町と接し(旧国府町)、南東は郡家町・船岡町と(旧鳥取市・河原町)、南は岡山県阿波村と(旧用瀬町)、あるいは辰巳峠を介して岡山県上斎原村恩原高原と接する(旧佐治村)こととなった。また南西から西は旧国名でいう因幡国と伯耆国(現湯梨浜町・三朝町)との国境(旧青谷町・気高町・鹿野町)まで広がって、新生鳥取市として新たな飛躍・発展に向けた一歩が始まっている。

合併以前の各市町村では原始・古代からそれぞれの地域あるいは他地域と交流を持ちながらそれぞれの特性に合った人々の生活、土地利用が行われてきた。例えば平野部は主に水田や近郊農業等の耕作地として利用されるとともに、丘陵地は梨を中心とする果樹栽培地として本市内外へ農産物を供給してきた。また山間部では林業が、さらに砂丘や温泉を利用した観光等にも力が入れられてきた。しかしながら昨今では長年にわたる不況や第一次産業の後継者不足等によってしだいに産業構造が変化するとともに土地利用も大きく変容している。

このような背景の中、鳥取市内には各地域それぞれに数多くの遺跡が残されてきている。遺跡の種類は各時代・各種にわたり、これまでの遺跡分布調査によって4,600ヶ所を超える古墳・遺物散布地等が確認されるとともに現在もその増加の途をたどっている。このため各種開発事業計画との調整が必要となる遺跡もその数を増している。

### 1. 発掘調査の契機と調査の目的

今回報告する服部古墳群、天神山遺跡の調査は、前者が民間の土砂採取計画、後者が民間の施設建設計画にともない実施したものである。事業計画と事業地内における埋蔵文化財の所在確認依頼を受けた鳥取市教育委員会では当該地はいずれも周知の遺跡あるいはその範囲内に含まれるものの、現況から遺跡の所在や規模等を把握することが困難であったため、より詳細な資料をもって事業計画との調整を計る必要性が生じた。このため遺跡の所在、規模、遺構・遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の資料を得ることを目的として発掘調査を行うこととなった。

### 2. 発掘調査の経過

発掘調査は、両調査区ともトレンチ掘削による遺構および遺物の包含状況の確認に主眼をおいて行うこととし、現地調査は服部古墳群、天神山遺跡の順に実施した。

服部古墳群の現地調査は平成16年6月16日から同月24日まで、墳丘とみられるマウンドの主軸線上あるいはくびれ部の裾部傾斜変換点や墳丘状のマウンドが在ったとされる平坦部から緩傾斜地にかけて計4本のトレンチを設定して調査を行った。その結果、上部が流失あるいは削平されているものの墳丘裾部が地山整形された古墳とみられるマウンドや周溝とみられる溝状遺構、主体部等の遺構の存在を示唆するとみられる上層の変化や若干の土器片を確認した。調査面積は38.15m<sup>2</sup>である。

天神山遺跡の現地調査は、11月4日から同月11日まで周辺古絵図に堀が在ったとされる推定部分にまず1本のトレンチを設定して調査を行った。その結果、堀とみられる溝状遺構と多量の遺物が検出され、県教育委員会との協議・指導により、その広がりを確認するために遺構の延長線上にさらに1本のトレンチを設定して調査を実施することとなった。調査の結果こちらのトレンチからは土坑等の遺構と遺物が検出された。計2本のトレンチ調査面積は77.6m<sup>2</sup>である。

なお整理作業は各調査時に若干行い、最終的に報告書作成作業と併せて平成17年1月に行った。



第 1 圖 調査地域辺境線分布図

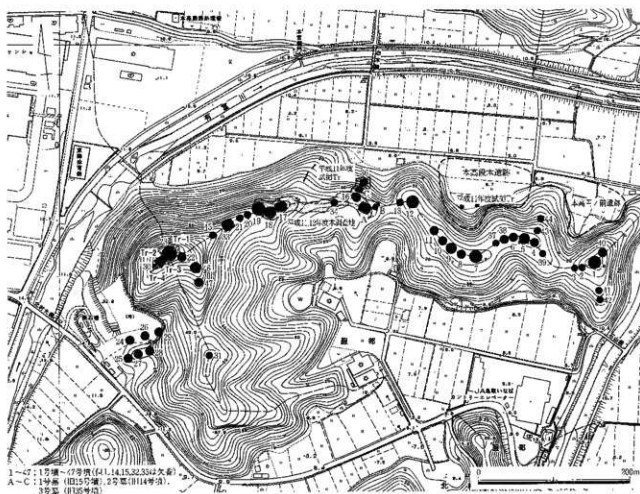
## II 服部古墳群

### 1. 遺跡の位置と環境

服部古墳群は鳥取平野南西部に位置する鳥取市服部、本高、北村にまたがって所在する標高80m前後の独立丘陵上に立地する。J R鳥取駅からは主要地方道鳥取鹿野倉吉線から主要地方道鳥取河原線を経由して南西方向に約3kmで、服部、本高、北村の各集落の中間辺りに位置する。この丘陵は、東側の千代川に並行して中国山地から鳥取平野へ延びる丘陵のうち、標高294m余りの「八町山」を頂きとしてさらに北東へと延びる丘陵の北端部に位置し、さらに北には有富川を挟んで独立丘陵「釣山」(標高104.7m)が続く。

周辺では昭和60(1985)年の鳥取国体を契機として国道29号線(旧国道53号線南バイパス)が整備されたことから次第に開発が広がり、その沿線には店舗や各種事業所が、また本調査区の西側には東郷工業団地が形成され、調査地以北でまず開発が進んできた。その後、本調査区の南東側には医療福祉施設が建設され、さらに東側丘陵上から北東側丘陵裾を起点とした中国横断自動車道姫路鳥取線整備事業が南側に向けて進展するなど近年開発が加速的に展開し、かつてののどかな山園風景が大きく変化しつつある。

周辺の遺跡としては、丘陵上には本古墳群の他に北側の釣山古墳群(総数42基)や南側の下味野古墳群(総数55基)が知られ、これまでに前者では平成2(1990)、3(1991)年度に小形の前方後円墳(2号墳/26.4m)を含む古墳6基と弥生時代後期の墓棺や住居跡が調査され、後者では平成12(2000)、14(2002)年度にそれぞれ5基の古墳、10基の古墳と弥生時代中期の土壇墓や堅穴住居、回後期の段状遺構等が調査されている。また本古墳群でも平成11(1999)、12(2000)年度に試掘調査のほか6基の古墳と弥生時代



第2図 服部古墳群 調査トレンチ配置図

後期の3基の墳墓が調査されている。平野部では、本古墳群の立地する丘陵北側裾部に位置する本高段木遺跡から二次堆積と考えられるものの、縄文時代晩期の突帯文土器が試掘調査で出土した他、その東側丘陵裾の高木ノ前遺跡では平成14(2002)年度に弥生時代後期の土坑や溝状遺構、中世の掘立柱建物や土坑、溝状遺構等が調査されている。また服部集落西側の標高7~8m程度の微高地上に服部遺跡が所在し、ほ場整備の際に弥生時代後期の土器や大足・田下駄等の木製品が出土している。

## 2. 発掘調査の概要 [第2図; PL.1]

今回の調査は民間の上砂採取計画にともなって実施したものである。当初当該地には服部23号墳と30号墳が立地することが知られていたものの、現況では前方後円墳である前者はその規模は全長32.5mとされているが不明確で、後者は流失等によるものか明確なマウンドも認められなかった。このためそれぞれについて規模確認あるいは古墳の有無の確認に主眼をおいて主軸線上やくびれ部の墳丘裾部に、また平坦部から緩斜面にトレンチを設定した。調査の結果、地山整形された墳丘裾部や周溝とみられる溝状遺構が検出された。

### 第1号トレンチ(1) [第3.4図; PL.1.2]

調査対象である服部23号墳後円部裾部に墳丘主軸線に沿って設定した1×9.25mのトレンチである。現地形では墳丘裾部とみられる傾斜の変換が認められるのみであったが、掘り下げの結果、厚さ10~15cm程度の表土下に部分的なものの可能性もあるが、傾斜の変化を持ちながら地山(明黄褐色の軟岩)がカットされ、さらに幅2.1mにわたって深さ10cm程度の浅い溝状に掘り込まれる。遺物は流土とみられる第4(黄褐色粘質土)層中から外反する口縁部片(1)1点が検出されている。

### 第4号トレンチ(1) [第3図; PL.1]

服部23号墳の北西側くびれ部に設定した1×6.2mのトレンチである。墳丘裾とみられる傾斜の変換付近の厚さ20cm程度の表土下に、一部地山(黄褐色土および軟岩)を掘り込む土坑状の遺構と考えられる土層の変化(第6層)を検出した。遺物はこの第6(暗灰褐色粘質土)層上面付近から土師器片が検出されている。

### 第2号トレンチ(1) [第3図; PL.2]

第2トレンチの墳丘を挟んだ反対側くびれ部に設定した1×7.4mのトレンチである。厚さ10~15cm程度の表土下は直ちに地山となる。深さ10cm程度と浅いながら、墳裾と考えられる地山カット部分を検出した。遺物は検出されなかった。

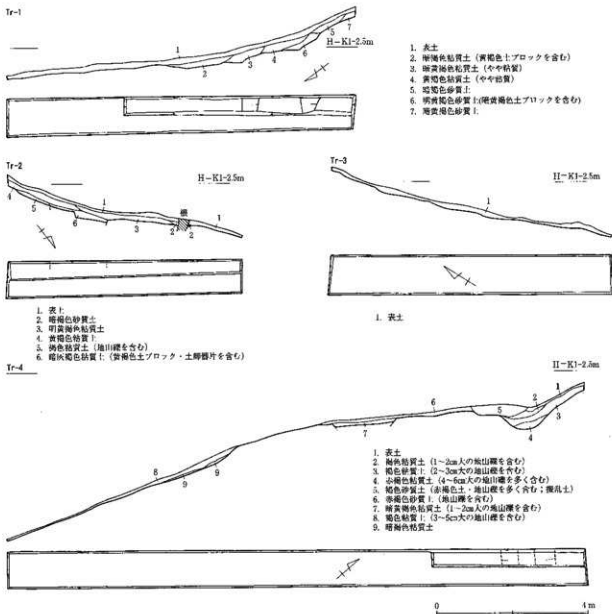
### 第4号トレンチ(1) [第3図; PL.2]

服部23号墳前方部裾部から服部30号墳が存在するとされる南西方向に23号墳の墳丘主軸線に沿って設定した1×15.3mのトレンチである。現地形は、墳丘裾部とみられる傾斜の変換が認められる以外はその南西側の平坦部から緩やかな傾斜地となっている。調査の結果、傾斜の変換点より南西側からは明確な腐葉土・表土層は認められなかったが、トレンチ北東端部から幅1.45m程度の地山(岩盤)をカットした周溝とみられる溝状遺構を検出した。またトレンチ中央部からは位置的に主体部の可能性も考えられる地山を掘り込む土層の変化(第7層)が認められ、さらにトレンチ中央よりやや南西側からは墳裾の可能性も考えられる地山カットが検出された。遺物は検出されなかった。

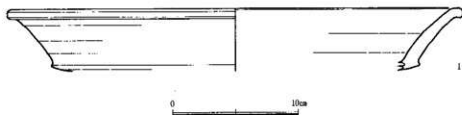
#### 〈小結〉

以上のトレンチ調査および周辺略測量調査の結果、服部23号墳については、全長31.3m、後円部径20m、くびれ部幅10m、前方部幅15m、前方部高1.9m、後円部高2.8mの規模の前方後円墳であることが確認された。

また服部30号墳については、上面が削平あるいは流失によって喪失した可能性があるものの、23号墳の南西に隣接して位置し、直径7.8m、高さ約1.3m(南西側裾部から)、同0.5m(北東側溝底から)の円墳が遺存することが確認された。



第3図 服部古墳群 調査トレンチ実測図



第4図 服部古墳群 第1トレンチ出土遺物実測図



### Ⅲ 天神山遺跡

#### 1. 遺跡の位置と環境

天神山遺跡は鳥取平野西部の潟湖である湖山池東岸、鳥取市湖山町地内に所在する岩島(海島)地形の標高20m程度の独立丘陵(天神山)とその周辺に広がる標高2m前後の平野部に展開する。JR鳥取駅からは主要地方道鳥取鹿野倉吉線から県道鳥取空港布勢線を經由して西北西方向に約4.5kmに位置する。現在の原立鳥取緑風高校(旧、県立鳥取農業高校)の敷地周辺にあたる。もともと天神山の南北に形成された洪積世砂州地形上を生活の場としていた可能性が考えられる遺跡の範囲は、中世の天神山城の形成にいたり、複合遺跡として北は旧湖山川(古川)、南は上述の主要地方道鳥取鹿野倉吉線付近、東は県道湖山停車場布勢線、西は湖山池東岸によって区切られるあたりが地籍図の地割等から想定されている。

周辺では、昭和41(1966)年の鳥取大学の湖山(濃山台地)への移転、同48(1973)年の天神山周辺への鳥取農業高校の移転、昭和60(1985)年の鳥取国体を契機とする布勢総合運動公園や各道路網等の整備・建設によって次第に開発が広がっている。現在も各道路沿線からその隣接地へ宅地開発等が進展しており、かつて山王山吉神社の祭日に遠近からの参拝者でにぎわったのどかな田園風景も大きく変化しつつある。

このような天神山周辺には原始から多くの遺跡が営まれている。現在知られる最古のものは縄文時代前期末の土器が少量ながら見つかった桂見遺跡で、中期の土器も出土している東桂見遺跡、布勢第1遺跡や青島遺跡が後期を中心とした低湿地遺跡として知られる。また砂丘(砂州)上に形成された天神山遺跡や湖山第2遺跡からも少量の縄文土器が出土している。弥生時代に入ると縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるほか、岩吉遺跡・桂見遺跡・東桂見遺跡等で稲作が導入され、岩吉遺跡からは掘立柱



第5図 天神山遺跡 調査トレンチ配置図



建物や水路、各種多様な遺物等が、桂見遺跡からは後期～古墳時代の水田跡や木製品等が、天神山遺跡からは銅鐵が検出されている。また後期になるとこれらの遺跡の外縁に位置する西桂見、桂見、布勢鶴指奥等の丘陵部に墳墓群が形成されている。古墳時代になると肥沃な鳥取平野の農業生産を背景として集落が形成・拡大されたものと考えられるが現集落と重なって営まれているものか、集落遺跡としての調査事例は少なく、今のところ微高地上に住居跡が点在する状況である。しかしながら周辺の低丘陵上には多くの古墳が造営されており、特に湖山地周辺には柵間1号墳(92m)、布勢1号墳(59m)、大熊段1号墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)等の前方後円墳や全長24.5mと小型ながら前方後円墳の桂見6号墳、船載の内行花文鏡と斜線鉄帯鏡が納められた桂見2号墳等がみられる。律令時代になると、この地域も全国的な律令体制の整備の中で、因幡国高草郡の一部として条里制が敷かれ、その地域内で東大寺領の「高庭庄」として開発されたことが『東大寺東大院文書』から知られている。遺跡としては現在も塔心礎の残る萬蒲廃寺、墨書土器の検出された萬蒲遺跡や山々鼻遺跡、多量の墨書土器や緑釉陶器・木筒・祭祀具等が検出された若吉遺跡等が知られる。その後東大寺の政治的地位の低下等により高庭庄の経営も悪化していくが、中世に入ると、14世紀に因幡守護に任じられた山名氏が15世紀に入って天神山に城を築いて守護所を「布施」に移し、因幡国支配の本拠地としたことから当地周辺は再び脚光を浴びることとなる。この時期の遺跡としては布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡等があり、多くの上墳墓・火葬墓が検出されている。また天神山城については江戸時代に記された『因幡氏談記』や『因幡志』等に古記録が残っており、それぞれの資料によって異なる点が多いことからその資料的価値に問題点も指摘されているものの、山頂の郭や堀割、橋、寺社や町屋、出城、葬地等が描かれているほか、良好な地割にも残存している。なお16世紀後半になると、但馬山名氏との対立のなかで築かれたと考えられる鳥取城に因幡支配の拠点が移っていったことから周辺地域はまた田圃地帯へと復すこととなる。

## 2. 発掘調査の概要 [第5図:図版PL.3]

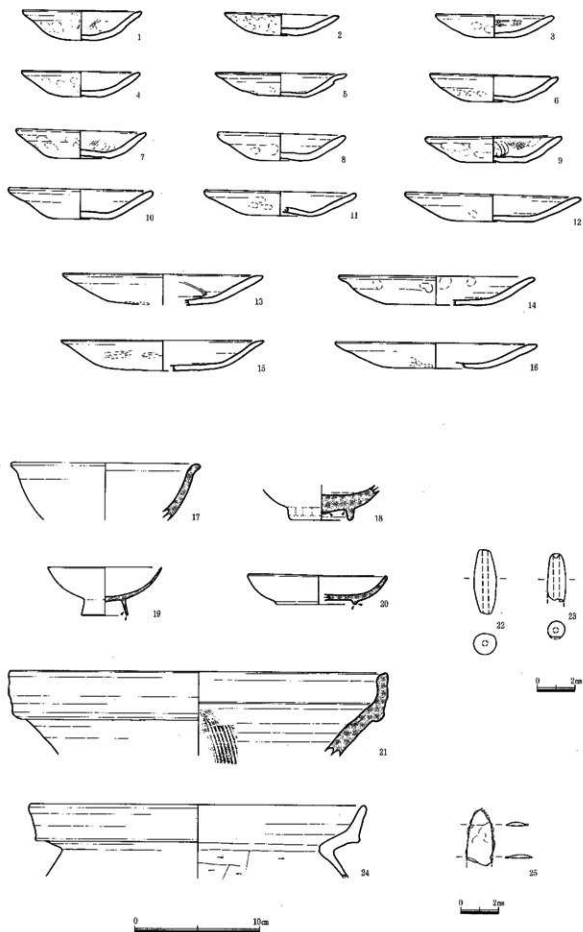
今回の調査は施設建設計画に伴うもので、先述の古絵図に認められる堀の存在確認に主眼をおいて実施した。対象地は標高2m程度の旧鳥取農業高等学校牛舎・農機具小舎周辺で、堀と直行方向の南北方向にまず長さ30m強の第1トレンチ(T r-1)を設定した。またその経過を見ながら堀の延長線と考えられる第1トレンチの西側に第2トレンチ(T r-2)を設定した。

調査の結果、堀とみられる溝状遺構や土坑(T r-1)、ピット遺構等(T r-2)を検出した。また、遺物はいずれのトレンチもその上層は客土あるいは乱れによって大きく乱れていたものの、多くの土師器皿や陶磁器類等が検出された。

### 第1トレンチ(T r-1)の調査結果 [第6図:PL.3～6]

旧牛舎の南西に設定した2×30.3mのトレンチで、地表面標高は2.5mである。地表面下に学校用地造成の際のものとみられる厚さ40cm前後の客土がなされ、トレンチ北側のこの客土下(標高約2m)から幅約12.5m、深さ1.8mの溝状遺構を検出した。断面観察や遺物の出土状況から、ナイロン等を含む客土で埋まる溝の中央部上半部は比較的近年まで溝状の落ち込みとして遺存していたことが見てとれる。またその下位の33・34層の堆積状況と溝両側部の堆積状況から時期は不明ながら溝の浚渫が行われた可能性も考えられる。

遺物は土師器、須恵器、陶磁器、弥生土器、土錘、鉄鐵、漆器片等が検出されたが、溝の底部中央からは土師器皿、漆器片がまとめて出土している。このうち土師器皿は色調は一部淡褐色のもの(2～4、6)もあるがおおむね淡褐色系で、大きさで小(口径11cm未満、1～9)、中(11～15cm、10～12)、大(15cm以上、13～16)に大別できる。いずれもゆるく外反する口縁で、基本的には体部内面と口縁部はヨコナデで調整され、外面下半にはユビオサエ痕が認められる。一部に顕著なナデ上げ(1～3)や布目痕(1、3、7、9)の認められるものがある。小サイズのものの中には口縁部に部分的に煤の付着したものの(2、6)



第7図 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

があり、灯明皿として使用された可能性も考えられる。また学校用地造成時に周辺の上を利用したとみられる客土中からの出土ながら、青磁碗(17)、青磁高台部(18)、染付壺(19)、銅板刷り皿(20)、摺鉢(21)、弥生土器壺口縁部(24)と、溝状遺構埋土中出土の管状土錘(22、23)、第1トレンチ周辺表採の鉄鍍片(25)を図化した。このうち青磁(17、18)はいずれも龍泉窯系と見られ、染付壺(19)には内面に「因州小山池」の銘が見受けられる。赤灰色の(21)は備前産とみられる。

なおトレンチ北端部から土坑およびピット状遺構を検出した。削平を受けている可能性も考えられるが、断面観察上は溝と同一面からの掘り込みで、ピットが土坑を切っていることがわかる。さらに、これらの遺構は炭片や明黄褐色土ブロックを含むしまったにぶい黄褐色粘質土(第66層)を掘り込んでいるが、この第66層も炭片等を含む地山ではない層と考えられる。

## 第2トレンチ(ア1～ア2) [第6図:PL.4,5,7]

第1トレンチの19m弱西北西、農機具小屋の西に設定した1×17.0mのトレンチで、地表面標高は2.4mである。地表面下に学校用地造成の際のものと思われる厚さ50cm強の客土がなされ、さらに各所に造成後のゴミ穴等による攪乱が認められたが、それ以下は比較的順層で、トレンチ北端部の地表面下70cm程度(標高約1.7m)から溝状遺構の可能性が考えられる層序の変化(第38層)が認められた(第1遺構面)。また地表面下0.9～1.1m程度の標高1.5～1.3m以下に部分的ながら炭や焼土を多く含む厚さ10cm程度の炭化層が認められ(第43、46層)、その下からピット状遺構4基(P-01～04)、溝状遺構、不明遺構、礎石状の平石等を検出した(第2遺構面)。このうちピット状遺構の規模(径×深さ×cm)はそれぞれP-01/40×23、P-02/(111)×21、P-03/(54)×29、P-04/32×15.8を測り、P-01埋土中には多量の焼土が含まれる。また礎石状の平石は上面はほぼ水平で、大きさは60×36×8cmを測り、一部に被熱が認められる。なおこの第2遺構検出面下の第55(浅黄色砂)層は厚さは10cm程度ながら須恵器杯蓋や糸切り底部片等を含む遺物包含層である。

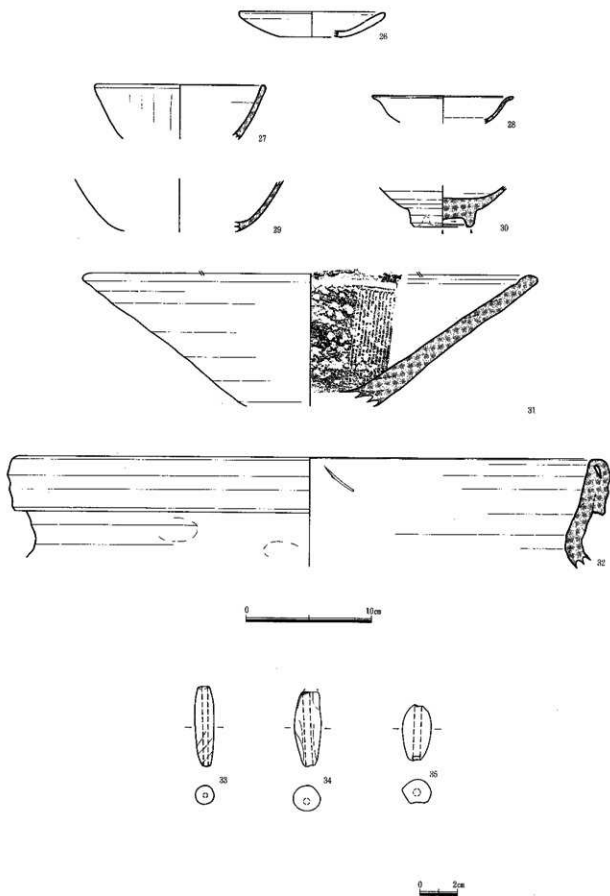
第2トレンチからも遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器等が検出されたが、いずれも細片が多く、土師器皿(26)、青磁碗(27)、染付皿(28)、染付片(29)、高台部片(30)、摺鉢(31)、壺口縁部片(32)、管状土錘(33～35)を図化した。(29)と(35)は第1遺構面の上の層、(30～32)は第2遺構面の上の層付近、(27)は第2遺構面直上、その他が攪乱土等からの出土である。このうち外面に陰刻の認められる(27)は龍泉窯系、染付の(28、29)と陶器の(30)は肥前産、にぶい赤褐色の(32)は備前産とみられる。(31)は産地は不明ながら、11条以上の単位の摺り目が刻まれ、内面は使用によるとみられる磨滅が著しい。

### 《小結》

以上の結果と昭和47(1972)年の鳥取農業高等学校建設工事中の調査結果(以下「47年調査」と呼ぶ)や古絵図と照らし併せると、第1トレンチ北側から検出した溝状遺構は「47年調査」で外堀とされた、古絵図に見る内堀と考えられ、それは第2トレンチまでは延びないことが判明した。遺構の時期は底部床面付近出土の土師器皿等から16世紀前半代と考えられる。

また、第1トレンチ北側の北壁および東壁に見られる第66層は、地山とみられる均一な第67(明黄褐色粘質土)層とは明らかに異なり、上述の内堀との関係から、「47年調査」で土壘(築地基壇?)とされた遺構と同様のものの可能性も考えられる。

第2トレンチについては、2面の遺構面(第35層下面:第1遺構面、第43・46層下面:第2遺構面)と地山上に遺物包含層(第43層)が認められた。このうち第1遺構面は時期は不明であるが、第2遺構面はその直上から検出された青磁等から15世紀末から16世紀前葉頃と考えられる。



第8図 天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図

# 写真図版



1. 服部古墳群 航空写真



2. 服部古墳群 第1トレンチ  
掘り下げ状況(北東から)



3. 服部古墳群 第1トレンチ  
南壁断面(北から)



4. 服部古墳群 第2トレンチ  
掘り下げ状況(北西から)



5. 服部古墳群 第2トレンチ  
西壁断面(北から)





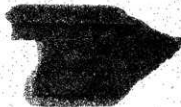
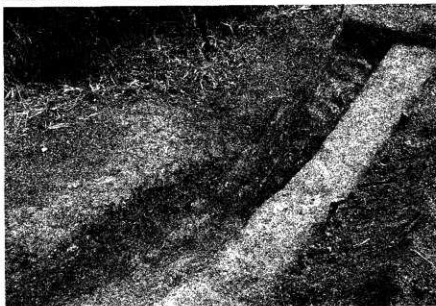
1. 服部古墳群 第3トレンチ  
掘り下げ状況(南東から)

2. 服部古墳群 第3トレンチ  
東壁断面(西から)



3. 服部古墳群 第4トレンチ  
掘り下げ状況(北東から)

4. 服部古墳群 第4トレンチ  
周溝部分断面(南から)



5. 服部古墳群 第1トレンチ出土遺物



1.天神山遺跡  
調査地遠景(南西から)



2.天神山遺跡 第1トレンチ  
掘り下げ状況(北北東から)



3.天神山遺跡 第1トレンチ  
東壁断面(北から)

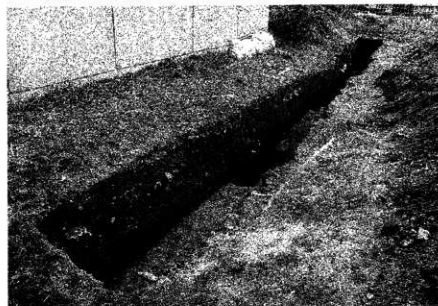
1. 天神山遺跡 第1トレンチ  
遺構内遺物出土状況  
(北北東から)



2. 天神山遺跡 第2トレンチ  
掘り下げ状況(北から)



3. 天神山遺跡 第2トレンチ  
東壁断面(北西から)





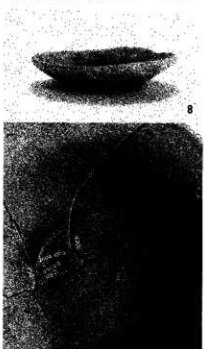
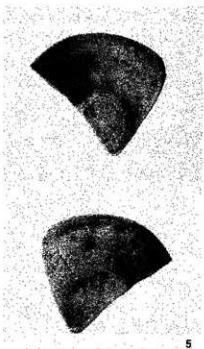
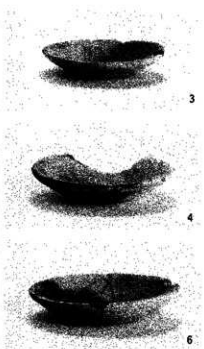
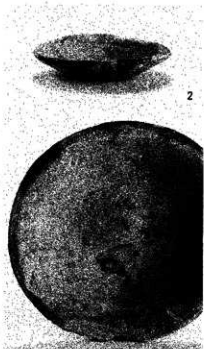
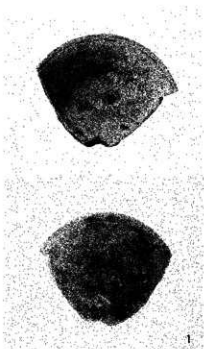
1. 天神山遺跡 第2トレンチ  
P-01断面 (西北西から)



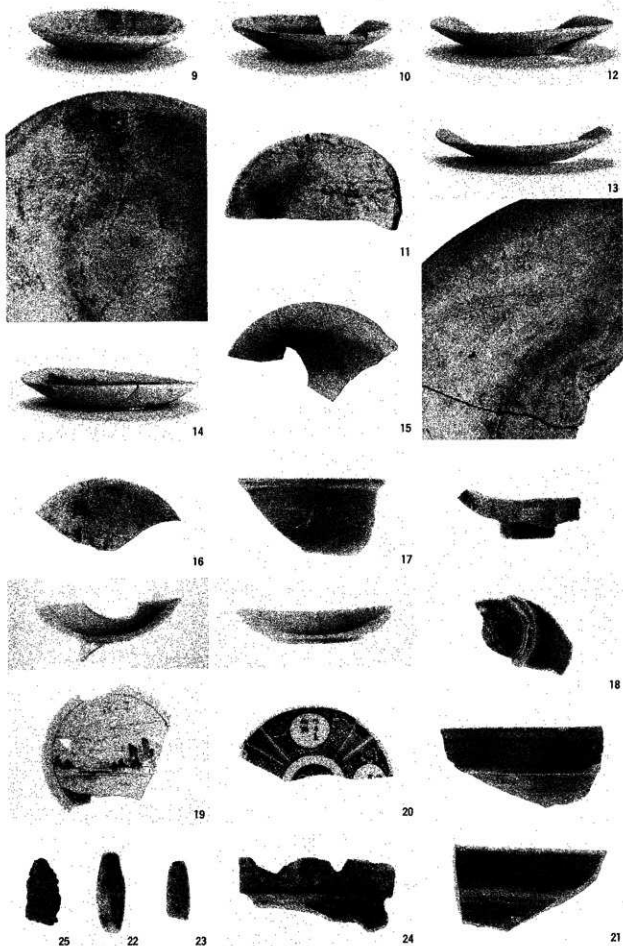
2. 天神山遺跡 第2トレンチ  
P-04断面 (西北西から)



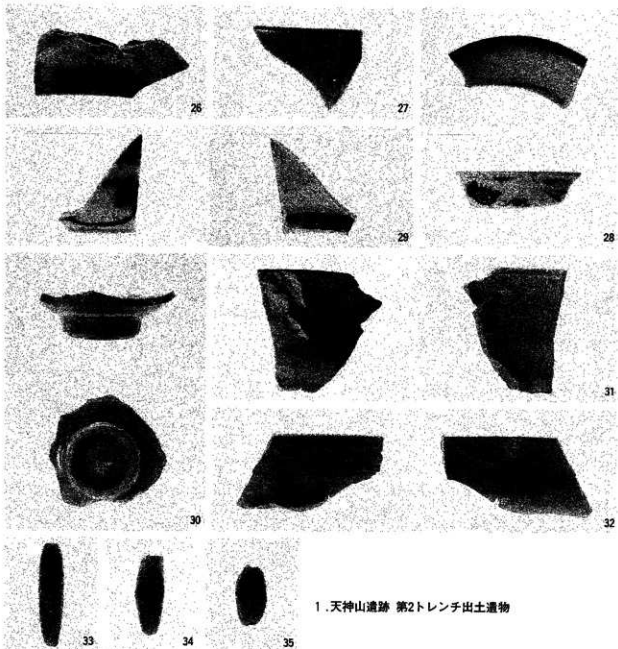
3. 天神山遺跡 第2トレンチ  
礎石状平石検出状況 (西北西から)



4. 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物 (1)



1. 天神山遺跡 第1トレンチ出土遺物 (2)



1. 天神山遺跡 第2トレンチ出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせい16(2004)ねんど とっとりしないいせきはつくつちようさがいようほうこくしょ								
書名	平成16(2004)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書								
副書名	服部古墳群、天神山遺跡								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	平川 誠 山田真宏								
編集機関	鳥取市教育委員会								
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39 TEL (0857) 22-8111(代)								
発行年月日	西暦2005年 3月15日								
ふりがな	ふりがな	コ	ー	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		° ' "	° ' "		(㎡)	
服部古墳群	北村 鳥取市本高 服部	31201			35°28'40"	134°11'39"	20040616 20040624	38.15	土砂採取
天神山遺跡	鳥取市布勢	31201			35°30'29"	134°10'35"	20041104 20041111	77.6	施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
服部古墳群	古墳	古墳時代	周溝、地山カット	土師器・緑部片					
天神山遺跡	城館	中世	堀、ピット状遺構	土師皿、陶磁器					

---

平成16（2004）年度  
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成17年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会  
印刷所 株式会社 矢谷印刷所

---